

プロフェッショナルスピリットが問われる

小川 清

公益社団法人日本診療放射線技師会 副会長



業務拡大に伴う統一講習会が始まった。JARTIS情報システムの改修などで受け付けが遅れ、皆さまにはご迷惑をお掛けしたが、7月開始と同時に会員の皆さまの期待などと相まって、たくさんの受講者が集まり幸先よいスタートが切れたこと、ひと安心である。前回行われた統一講習会は、CTやMRIの普及とデジタル時代の幕開けとの認識から多くの会員が受講した。受講したら何かが得られるという思惑もあったが、多くの会員が知識欲に目覚め、たくさんの会員参加の下、皆で勉強していこうと燃えていた時代であった。そこでは診療放射線技師業務として「画像診断装置を操作する」から「画像検査をする」に切り替わる時でもあった。そしてその後のADセミナーについても、診療放射線技師として必要な新たな知識が得られると期待され多くの会員が勉強した。

平成22年ごろから始まった厚生労働省 チーム医療推進方策検討WGでは、チーム医療について多くの議論がなされいまだに継続されているが、その中で、医療技術系職種が関与する部分において手厳しい意見が述べられている。医療職能団体から、研修の義務化・制度化・法制化の要望に対し「それは安易だ。医療職としての質の向上は自らやらないといけない」などの医療職の「あるべき姿」論がある。一方で「医療職として、プロとしての誇りが弱い感じがする。大事なことは、業として行わなければならないわけですから、それぐらいは自分たちで判断して、きちんと末端まで徹底させること。医療専門職が自分たちの専門分野に誇りを持って、そしてもう少しアクティブにやっていかないと、これからのチーム医療の進歩はない」という前向き論、あるいは後押し論がある。私は、要望は行いつつも、この2つの意見を真摯に受け止めていきたい。

スタートした業務拡大に伴う統一講習会において、追加研修の受講は法令上の義務とされておらず、あくまで任意で受講していただくことを奨励するという位置付けが厚生労働省のスタンスだ。研修を受講していただければ、医療安全上の問題はないとの判断だ。

診療放射線技師個人として受講するか、受講しないか。管理者として管理下の診療放射線技師を受講させるか、個人の自主性に任せ放っておくか、プロフェッショナルスピリットが問われる。あなたが勤務している医療機関を、そして診療放射線技師軍団を引っ張っていただきたく態度を明確に表してほしい。医療監査の際に問われて、あたふたする前に…。

一方で、今努力した人が報われる社会をつかっていかねば、質の高い教育研修とならず、将来は闇になる。報われるとはどういうことか、また考えてみたい。

(チーム医療推進方策検討WG議事録から一部引用)